



Title	新しい社会経済的リアリティをつくる：フランスにおける地域開発の民族誌的研究
Author(s)	中川, 理
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46615
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について ご参照 ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	なか がわ おさむ 中 川 理
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学位記番号	第 19966 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間学専攻
学位論文名	新しい社会経済的リアリティをつくる—フランスにおける地域開発の民族誌的研究—
論文審査委員	(主査) 教授 中川 敏 (副査) 教授 小泉 潤二 教授 春日 直樹 教授 栗本 英世

論文内容の要旨

本論文は、フランスにおける地域開発の実践によって、対象となる地域の人々のあいだにどのような社会的経済的リアリティが生み出されているかを、民族誌的手法によって分析した。その結果、「社会的きずなの欠如」という社会問題がさまざまなアクターのもつれあいによって構築され、この問題を扱う組織の取り組みのなかで、地域通貨による新しい交換の領域が生成してきたことを示した。その上で本論は、この領域で行われる交換を、参加者たちが「遊び」の枠組みによって理解していることを明らかにした。

1章において、どのようにして「社会的きずな」が取り扱われるべき問題としてクローズアップされるようになったかを歴史的に検討した。1980年代の大量失業にともない、これまでのように個別的人々を扱うソーシャルワークから、地域を対象として介入しようとするやり方へと方向転換がなされた。特に「経済による組み込み (l'insertion par l'économique)」の政策は、それぞれの個人が最終的に通常の雇用に復帰できるように職業訓練を行う取り組みのかたわらに、代替的な経済活動を地域に組織するという方向付けを進展させていった。連帯経済と呼ばれる取り組みや地域通貨の発展は、雇用への復帰が見込まれない「排除された」人々を、それでも社会のなかにつなぎとめ、交換のネットワークに組み込もうとする試みとして発展してきた。

1章の続く部分で、このように歴史的に位置づけられる新しい実践を研究対象とするにあたって、どのようなアプローチを取ればよいかを検討した。これまでの研究が新しい政策の歴史的意味付けの問題に終始し、この政策がじっさいにどのような帰結をもたらしているかについて無関心であったことを確認し、その上で民族誌的アプローチの必要性を説いた。開発の人類学の理論史とアクターネットワーク理論の取り組みについての検討によって、制度の生成と、作られた制度のなかで生きる人々のリアリティの生成を横断的に扱う「横断的アプローチ」を本論がとる立場として採用した。

続く三つの章で、「社会的きずな」という社会問題を扱う装置がどのように作られたか、その装置の中でどのような取り組みが行われているか、そしてその結果としてどのようなリアリティが生成しているかを、段階を追って分析した。その際、本論では事例として、フランス南部の小都市で「社会的きずな」を作る活動を地域通貨などを通して行っている「会うための場所」という組織をとりあげた。

2章では、この組織が、どのようなプロセスを経て作り上げられたのかを検討した。その際、社会福祉行政に関係

している人々のあいだのコピナーージュと呼ばれる人間関係が重要であったと論じた。コピナーージュは、「仲間関係」と訳すことのできる関係性である。私の対象地域の社会福祉行政においては、このような個人的信頼関係によって物事を推し進めようとする行政文化が存在している。「会うための場所」が形成される過程においても、コピナーージュを用いた合意形成が大きな役割をはたした。「社会的きずなの欠如」という問題が特定の取り組みを必要とする社会問題であるという合意は、科学的なデータによる論証というよりも、むしろ推進者に対する信頼によって形成されたことを見た。問題を扱う装置である「会うための場所」という組織があることによって現実となる「社会的なきずなの欠如」という問題は、多くの人間がからみあうプロセスによって構築されたことを論じた。

3章では、2章で分析した過程において構築された「社会的きずなの欠如」という問題を解決するためにどのような方法がとられているかを検討した。この際、重要となるのがアニマターと呼ばれるソーシャルワーカーであり、またアニマターが行う「活性化 (animation)」という介入の考え方であることを明らかにした。「活性化」とは、アニマター自身が指導的な立場に立って活動を推進していくのではなく、人々が自主的に活動を組織化していけるように「促し」「刺激する」、つまり「活性化する (animer)」という方法である。アニマターは相互扶助的で「ともに生きる」活動の状況を作り、そのなかに参加者を巻き込んでいくことによってこのような環境の価値に「気づかせ」ようとする。大人数が集まる昼食会や共同農園など「会うための場所」のすべての活動は、このような「気づき」を可能にする装置として考えられている。こうして相互扶助的な相互行為の「枠組み」を共有できるようにしていくことで、「社会的きずな」のある地域社会を作り出そうとしているとこの章で論じた。

しかし、アニマターたちは理想的な相互扶助的な倫理を推進する一方で、同時にそこにおいて実際の利益を得られる代替的な経済領域を作り出そうとしている。4章では、「会うための場所」での交換のメディアである地域通貨交換の分析によって、この背反する状況において、どのような行為の「枠組み」が作り出されているかを検討した。それによって、次のような状況があることが分かった。一方で、コア・メンバーたちは、地域通貨という仮想の通貨が、それを用いて財やサービスを獲得することができる「本当の通貨」であるというリアリティを作り出そうとしている。その一方で、地域通貨は仮想のものに過ぎないので通貨の獲得に本気になってのめりこんではならない、と通貨の現実性の否定を行っている。この状況を、グレゴリー・ベイトソンの言う「遊び」の枠組みという概念で分析できる。すなわち、人々は、これはゲームに過ぎないと意識しつつ地域通貨のゲーム (交換) を行うという「遊び」としての交換の枠組みを形成しようとしている。この「遊び」の枠組みによって、地域通貨は、経済的な必要を満たすための交換を行いつつ、かつ相互扶助の倫理を維持しようとしているのであると結論した。しかし同時に、コア・メンバーたちが作り出そうとするこのようなリアリティの「枠組み」は、通貨の獲得に必死になる人々や、逆に通貨の使用をやめて贈与として交換を理解してしまう人々がいることによって壊れてしまう「もろい」ものである。そのため、「会うための場所」における地域通貨の実践は、「遊び」の枠組みをなんとか生成維持しようとするプロセスとして理解できると論じた。

以上の分析によって本論は、集合的なプロセスによって、新しい交換の領域が作り出され、その交換についての人々の理解が不安定さをはらみながら生み出されていることを明らかにした。それによって、文化を静態的なパターンとしてではなく、生成しつつあるリアリティとしてとらえるアプローチの可能性を提示した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、申請者の3年間の調査に基づいて、南フランスのある地域の人々のあいだにどのような社会的・経済的リアリティが生み出されているかを、民族誌的手法によって分析したものである。

「地域開発」という脈絡の中で、「社会的きずなの欠如」という社会問題が構築されていくさまが、まず、分析される。1章は、フランスの国家レベルでの議論であり、豊富な文献資料に基づいている。2章は、地域行政レベルの議論であり、行政内でのフィールドワークに基づいている。

その「欠如」を補うために、「会うための場所」という組織が作られ (3章)、そしてその組織によって地域通貨による交換が生み出される (4章)。3章は、社会活動家 (アニマター) の「ともに生きること」 (convivialite) を目標

とする活動に焦点をあてられる。4章では、「きずなの欠如」を補填すべく生み出された地域通貨に分析の焦点が移る。「きずな」の回復という側面を強調すると、地域通貨は、「ほんとうの貨幣」から離れていき、参加者間での「まじめさ」が欠如することになってしまう。逆に「まじめさ」を強調すると、「きずな」の回復という当初の目標から解離してしまう。当初からこのような一種のジレンマを抱えこんだ「地域通貨」を、しかしながら、参加者たちは、どうやらこうやら、使用して、組織を運用していく。この綱渡りの運営を分析するのに、申請者はG・ベートソンによる「遊び」の議論を導入することで、明晰に分析する。

申請者は共同体・交換という理論的な課題、地域開発という実践的な課題に挑戦し、それを緻密な調査と精密な理論的な議論の中で解決している。本論文は博士（人間科学）の学位にふさわしいものと判定する。